

中学生における学校適応度と自己意識の関係について

金木 智子*・塚野 州一

(2002年9月2日受理)

The Relation of the School Adjustment and the Self-Consciousness in the Junior High School Pupils

Tomoko KANAKI and Shuichi TSUKANO

キーワード：中学生，学校適応，自己意識，未来展望，自己受容

Key words : Junior High School Pupils, School Adjustment, Self-Consciousness, Future Perspective, Self-Acceptance

問 題

平成13年の文部科学省学校基本調査によると，平成11年度の長期欠席者（30日以上欠席者）数は，小学校児童，中学校生徒ともに前年度より減少した。しかし，長期欠席者のうち「不登校」を理由とする児童・生徒数は，小学校児童26,044人（前年度より27人増加，増減率0.1%），中学校生徒104,164人（前年度より2,000人増加，増減率2.4%）の合計130,208人で，30日以上欠席者を調査し始めた平成3年度間以降過去最高である。不登校に対してはさまざまな形で対応がなされているが，依然として教育現場の主要な問題であり，学校不適応の一つの典型であることに変わりはない。

不登校の研究は不登校児を対象に行われるのは当然だが，登校している子どもたちを対象にして，学校を回避する傾向をみた研究もある。たとえば，本間（2000）は登校児の学校回避感情に加え，学校に惹かれる理由を検討し，欠席願望を抑制するために，友人関係の改善や学習理解の促進が有効であるとした。さらに，なんらかの形で生徒が学校生活に魅力を感じて登校することが，欠席願望ひいては不登校の予防に最も有効だという。

健全なパーソナリティや精神的健康の指標として時間的展望があげられる。白井（1997）は，時間的展望（time perspective）を個人の現在の事態や行動を過去や未来の事象と関係づけたり，意味づけたりする意識的な働きで，とくに人生にかかわるような長期的な時間的広がりのある場合としている。

時間的展望の1つの測定方法に，Zazzo（1974）の自己の価値づけ調査の方法がある。彼女は，子どもの自己価値の発達について，「赤ちゃん」，「大人」，「自分の今の年齢」について選択・受容・拒否を問う方法で検討し

た。日本においてもこの追試的調査は多く実施されてきた（塚野，1978.都筑，1981.小森・宗内，1995.大野，2000.）。塚野・金木（2000）は自己の価値づけ調査の特徴を投影法的で，対象者の希望や感情を回答に投影させ，特定の望ましい回答は存在しないので，登校児だけではなく不登校児にも適用できることにあるとした。

また，金木・塚野（2001）は不登校児と登校児では，自己の価値づけ方が異なる傾向を示していることを明らかにした。

本研究では，自己の価値づけ調査でとらえた自己意識を一つの軸にして，登校児を対象に，学校適応，不適応の児童・生徒の意識構造をとらえる。そこから不登校児の問題解決の方向を見い出すことを第1の目的とする。学校適応度によって，過去・現在・未来のそれぞれの時期における自己意識はどのように異なるか，また未来展望と自己受容はどうかの実態を探る。それによって不登校児童・生徒の意識構造を明らかにすることを第2の目的とする。

方法及び結果

調査1：学校適応度による生徒の類型化

目的

学校生活，友人関係についての意識調査を実施し，学校生活への適応度別に生徒を類型化する。

方法

対象：T県内Y中学校生徒480名，H中学校生徒335名，計815名の生徒を対象に質問紙調査を実施した。有効回答数は642名（78.9%）であった。

調査時期：2001年11月下旬～12月上旬

調査方法：学級担任に依頼し，学級ごとに実施した。

* 社会福祉法人 めひの野園

調査内容：二宮（1990）は中高生の学校生活に対する意識をとらえる枠組みとして、「学校適応-脱学校」「仲間志向-孤立志向」の2つの尺度を軸に生徒を4つの類型に分けている。これを参考にし、学校魅力に関する12項目、友人適応に関する11項目の計23項目を作成した。それぞれの質問に対して「かなりあてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の5件法で回答を求めた。

分析方法：調査結果を主因子法によって因子分析した。次に学校についての項目と、友人関係についての項目の尺度得点から標準偏差（SD）を算出し、1/2 SD 以上得点が上回る、または-1/2 SD 以上得点が下回る生徒を抽出した。

結果

質問項目を主因子法で因子分析したところ、2因子が抽出された（バリマックス回転後）。結果を TABLE 1 に示す。因子負荷量の小さい項目が23項目中3項目みられたため、分析対象から外した。「自分にとって学校はいごちが悪い」は第1因子（.487）と第2因子（.431）に両方にある程度の負荷量を有しているが、内容的に類似した項目が含まれている第1因子にいった。第1因子

は授業や規則、登校に関する項目であり「学校社会適応因子」と命名し、第2因子は友人とのかかわりについての項目であり「仲間志向因子」と命名した。

類型化は、以下のような手続きで行った。全対象者の学校社会適応因子と仲間志向因子の尺度得点の平均値、SDを算出した。そして、得点が1/2 SD 以上上回る、または得点が-1/2 SD 以上下回る生徒を対象として、縦軸に学校社会適応、横軸に仲間志向をとり、第1象限から第4象限までを左回りに順に類型Iから類型IVとした。

類型Iは学校社会適応プラス及び仲間志向プラスの生徒、類型IIは学校社会適応プラス及び仲間志向マイナス、類型IIIは学校社会適応マイナス及び仲間志向マイナス、類型IVは学校社会適応マイナス及び仲間志向プラスの生徒である。既述の二宮はこの類型について、類型Iを「適応型」、類型IIを「勉強型」、類型IIIを「孤立型」、類型IVを「逸脱型」とした。本研究でもこの命名を採用する。この手続きの結果、適応型が102名（15.89%）、勉強型が29名（4.52%）、孤立型が74名（11.53%）、逸脱型が56名（8.72%）、どの類型にも属さないものが381名（59.34%）となった。類型化した生徒の内訳は FIGURE 1 に示した。

TABLE 1 学校生活に対する意識の因子分析結果

項	目	学校社会適応因子	仲間志向因子	共通性
21	学校を休みたいという気持ちになる。	.668	.266	.517
10	授業を受けているのが苦痛である。	.667	.032	.446
15	学校の授業は時間のむだだと思ふことがある。	.656	-.010	.430
22	授業中でもおもしろくなければ別のことをしていてもかまわないと思ふ。	.599	.001	.359
7	学校に行きたくないと思ふことがよくある。	.560	.275	.389
12	自分にとって学校はいごちが悪い。	.487	.431	.423
18	学校で受けている授業はよく理解できる。	.447	-.072	.205
6	学校の規則は守るほうだ。	.399	-.041	.161
3	友だちと一緒にいると楽しい。	.065	.676	.462
19	仲のよい友人グループを持っていない。	-.006	.645	.416
11	友だちと一緒にいるより1人であるほうが気がらくだ。	.116	.642	.426
14	友だちとできるだけ一緒にいるようにしている。	-.027	.589	.348
8	親しい友だちがいる。	.048	.573	.331
9	友だちと一緒にになって勉強や遊びのグループをつくるのはいやだ。	.147	.545	.319
23	友だちから相手にされなくてもかまわない。	.109	.532	.295
1	今の学校生活に満足している。	.389	.520	.422
16	勉強以外のことを友だちとよく話す。	-.143	.455	.228
5	友だちとつきあうのがうとうしいと思ふときがある。	.127	.412	.186
17	友だちにはあまり大事なことは話さない。	-.047	.409	.169
20	友だちとのつきあいよりも自分のことを大切にす。	.119	.396	.171
13	今のクラスに対して親しみを感じる。	.366	.217	.181
4	先生には安心して相談できる。	.170	.381	.174
2	学校の勉強は、将来の生活や職業に役立つと思ふ。	.046	.306	.096
固有値		3.135	4.017	
寄与率		13.6%	17.5%	31.1%
α係数		.794	.825	

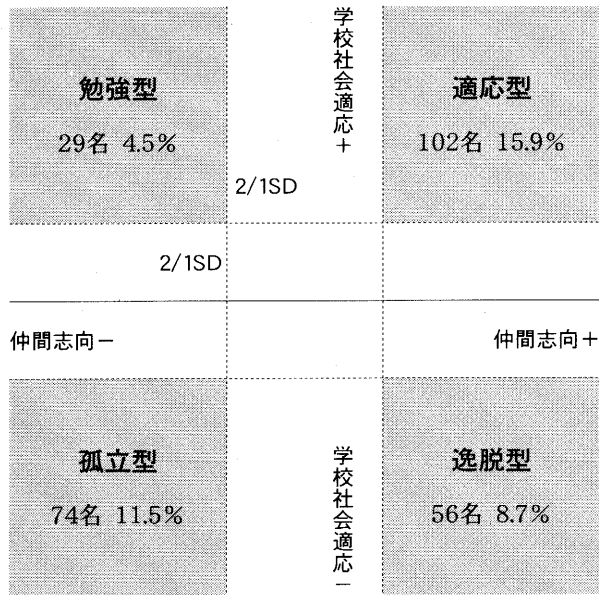


FIGURE 1 学校適応度による意識の類型

調査2：学校適応度による類型ごとの自己意識の実態

目的

適応型、勉強型、孤立型、逸脱型それぞれについて、自己の価値づけによる自己意識の実態を明らかにする。

方法

調査1の際に実施した。

調査内容「赤ちゃん」、「大人」、「今の自分の年齢」それぞれについて選択、受容、拒否の回答を求めた。また、3つの時期の中から一番よいと思う時期について回答を求めた。

分析方法：適応型、勉強型、孤立型、逸脱型それぞれの自己の価値づけ数を類型間で有意差検定を行った。

結果

TABLE 2には学校適応の類型ごとの「今の自分の年齢」に対する選択、受容、拒否の回答数を示した。 χ^2 検定の結果、類型ごとの人数は有意であった ($\chi^2_{(6)}=42.25, p<.001$)。そこで残差分析を行ったところ (TABLE 2 参照)、適応型は現在の自分を選択する傾向にあるのに対して、孤立型は現在の自分を拒否する傾向があることが示された。

TABLE 3には類型ごとの過去、現在、未来の選択数を示した。 χ^2 検定の結果、類型ごとの人数は有意であった ($\chi^2_{(6)}=21.03, p<.01$)。そこで残差分析を行ったところ (TABLE 3 参照)、適応型は過去を拒否し現在の自分を選択する傾向にあるのに対して、孤立型は過去を選択し現在の自分を拒否する傾向があることが示された。

調査3：類型ごとの未来展望の実態

目的

調査2で未来に対する価値づけ方には類型間で有意差

TABLE 2 今の自分の年齢に対する価値づけ

	適応型	勉強型	孤立型	逸脱型
選択	63(61.8) 2.6 4.4*	16(55.2) 1.1 1.6	16(21.6) -3.0 -4.7**	21(37.5) - .8 -1.2
受容	13(12.8) - .4 - .6	10(34.5) .4 .4	22(29.7) .4 .5	15(26.8) - .1 - .2
拒否	26(25.5) -2.9 -4.3**	3(10.3) -1.8 -2.2*	36(48.7) 3.4 4.8**	20(35.7) 1.2 1.5
合計	102	29	74	56

注) 上段は人数, カッコ内は比率, 中段は期待値, 下段は調整された残差。*p<.05, **p<.01

TABLE 3 過去、現在、未来の時系列上の価値づけ

	適応型	勉強型	孤立型	逸脱型
過去	10(9.8) -1.5 -2.1*	5(17.2) - .3 - .3	20(27.0) 2.5 3.2**	7(12.5) - .6 - .7
未来	18(17.6) -1.2 -1.8	3(10.3) -1.1 -1.3	19(25.7) .4 .6	20(35.7) 1.9 2.5*
現在	74(72.6) 1.5 3.1**	21(72.4) .8 1.3	35(47.0) -1.5 -2.8**	29(51.8) - .9 -1.6
合計	102	29	74	56

注) 上段は人数, カッコ内は比率, 中段は期待値, 下段は調整された残差。*p<.05, **p<.01

はなかったが、未来を価値づけた回答理由には、未来に展望をもつものと展望をもたないながらも現実からの逃避願望から未来を選択するものが混在していた。そこで、未来への意識内容をさらに詳細に検討することが必要となる。ここでは各類型の未来への価値づけの特徴をより明確にするために、未来展望のあり方を検討した。

方法

調査1と合わせて実施した。

調査内容：金木・塚野 (2001) の調査から、未来に対する価値づけの理由で多かった項目「資格や免許が取れるから」、「夢をかなえたいから」、「自立したいから」、「自由がないから」などを参考に、未来に対するプラスイメージ、マイナスイメージを含んだ22項目を作成した。それぞれの質問に対して「かなりあてはまる」5点、「ややあてはまる」4点、「どちらともいえない」3点、「あまりあてはまらない」2点、「全くあてはまらない」1点の5件法で回答を求めた。

分析方法：調査結果を主因子法によって因子分析し、抽出された因子と適応度の関係をみるために、分散分析を行った。

結果

質問項目を主因子法で因子分析すると、4因子が抽出された(バリマックス回転後)。結果をTABLE 4に示す。まず、第1因子は将来を自己の夢の実現のときととらえている5項目で、「目的志向因子」とし、第2因子は今に比べて未来に魅力を感じていることを表す5項目で「逃避因子」とし、第3因子は未来についてマイナスイメージを持ち、大人になることを拒否する6項目で「拒否因子」とし、第4因子は未来に対する明るく幸福なイメージに関する項目で「希望因子」と命名した。このように未来展望についての項目は4因子解とした。

中学生の未来展望は、さまざまな要因によって形成されていることが考えられる。そこで、学校適応度による類型によって、生徒の未来展望がどのように異なるかについて分散分析を試みる。

① 未来に対する目的志向

「目的志向因子」は適応度によって異なるのかを検討するために、「目的志向因子」の因子得点を従属変数として、適応型、勉強型、孤立型、逸脱型の4水準を独立変数とする1要因4水準の分散分析を行った。結果は、 $F_{(3,257)}=0.61$ であり、中学生は適応程度に限らずほぼ同程度の目的志向をもっているといえる。

② 未来に対する逃避意識

「逃避因子」の因子得点を従属変数として、未来に対

する目的志向と同様に、適応型、勉強型、孤立型、逸脱型の4類型を独立変数とする1要因4水準の分散分析を行った結果がFIGURE 2である。分散分析の結果、 $F_{(3,257)}=9.55$ であり0.1%水準で有意差があった。さらにLSD法を用いた多重比較の結果、適応型と孤立型の間で1%水準、適応型と逸脱型の間で0.1%水準、勉強型と孤立型の間で1%水準、勉強型と逸脱型の間で0.1%水準の有意な差が認められた(MSe=0.80)。これらのことから、孤立型、逸脱型は、適応型、勉強型に比して未来に対して現実逃避的な意識をもつといえる。

③ 未来に対する拒否意識

未来に対する拒否傾向を適応類型別に比較するため、「拒否因子」について各適応類型の因子得点を目的変数とした分散分析を行ったところ、 $F_{(3,257)}=1.83$ で有意差はなかった。

④ 未来に対する希望意識

未来に対する希望意識を適応類型ごとに比較するため、「希望因子」について各適応類型の因子得点を目的変数とした分散分析を行った結果、0.1%水準で有意差があった($F_{(3,257)}=17.34, p<.001$)。結果をFIGURE 3に示した。さらにLSD法による多重比較によって類型間の差を検定したところ、適応型と勉強型の間で1%水準、適応型と孤立型の間で0.1%水準、勉強型と孤立型の間で5%水準、孤立型と逸脱型の間で0.1%水準の有意差が認め

TABLE 4 未来展望についての因子分析結果

項	目	目的志向因子	逃避因子	拒否因子	希望因子	共通性
10	将来かなえたい夢がある	.631	.028	.138	.223	.467
2	大人になったらやってみたいことがある	.568	.317	.126	.156	.464
15	人生や生き方について考えることがよくある	.547	.071	-.051	-.036	.308
13	将来のために準備していることがある	.543	.045	.107	.109	.320
6	大人になって取得したい資格や免許がある	.539	.153	.105	.054	.328
3	今よりも大人になってからのほうが楽しそうだ	.236	.678	.339	.051	.634
1	早く大人になりたいと思う	.291	.604	.388	.033	.600
14	大人は今の自分より自由があると思う	.104	.589	.084	.067	.370
8	学校の勉強がない大人がうらやましい	-.027	.555	-.098	.105	.330
9	早く自立したい	.283	.448	.210	.150	.347
18	今のままの年齢でいたい	.155	.243	.596	-.218	.486
20	将来よりも今のほうが楽しいと思う	.124	.262	.496	-.164	.357
7	大人になったら責任や義務が増えるのでいやだ	.168	.023	.493	.125	.288
12	将来のことを考えると暗い気持ちになる	.041	-.052	.479	.387	.384
4	できることなら大人になりたくない	.037	.122	.465	.018	.233
17	大人になると周囲に甘えられなくなるのではないかと不安である	-.160	.014	.421	.213	.248
19	自分の未来は明るいと思う	.129	.159	.014	.808	.695
16	将来はきっと幸福な生活を送っている	.110	.222	.021	.583	.402
21	自分の未来を自分の力で思い通りにできると思う	.197	.036	-.002	.408	.206
5	早く働きたい	.365	.385	.194	.153	.342
22	将来はたいくつな毎日を送っていると思う	.161	-.009	.291	.359	.239
11	大人になって親を楽させた	.348	.096	.004	.169	.158
固有値		2.280	2.192	1.977	1.757	
寄与率		10.4%	10.0%	9.0%	8.0%	37.4%
α係数		.727	.759	.660	.679	

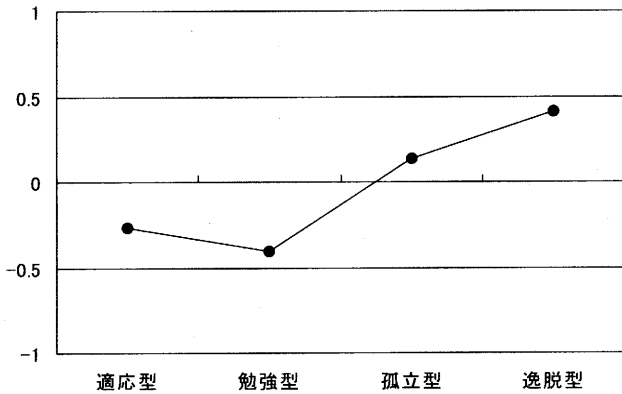


FIGURE 2 逃避因子-各類型の平均値

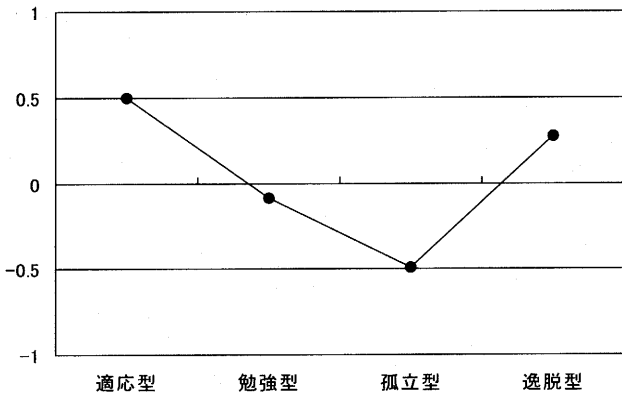


FIGURE 3 希望因子-各類型の平均値

られた (MSe=0.86)。このことから、適応型と逸脱型は未来に対して希望があり、逆に、孤立型は未来に対して希望が少ないといえる。

調査4：類型ごとの自己受容の実態

目的

調査2で現在に対する価値づけは類型間で有意差はなかったが、回答理由に現在を積極的に受容しているものと消極的な受容が混在したことから、現在の自分への意識のより詳細な検討が要る。各類型の「今の自分の年齢」の自己意識の特徴をより明確にするために、自己受容のあり方を検討する。

方法

調査1と併せて実施した。

調査内容：自己受容について伊藤(1992)は、中学生と大学生を対象に「生き方」「性格」「家庭」「学校」「身体能力」という5領域、計31項目からなる自己受容尺度を作成している。しかしこの尺度項目には、兄弟(姉妹)としての自分について答える項目など、調査対象者によっては回答できない項目がある。本調査では、この31項目のうちすべての生徒が回答可能な22項目のみを実施した。それぞれの質問に対して「好き」5点、「まあ好き」4点、「どちらともいえない」3点、「あまり好きではない」2点、「きらい」1点の5件法で回答を求めた。

TABLE 5 自己受容についての質問の因子分析結果

項目	自己受容因子	共通性
22 すべてを含んだ自分が	.724	.524
1 自分の生き方が	.714	.510
21 自分の生活が	.649	.421
2 自分の考え方が	.628	.394
6 自分の優しさが	.628	.394
12 生徒としての自分が	.626	.392
10 自分の協調性が	.615	.378
8 自分の明るさが	.607	.368
13 友だちの前での自分が	.597	.356
11 自分の自立性が	.586	.343
4 男性(女性)としての自分が	.583	.340
9 自分の積極性が	.559	.313
17 自分の容姿が	.542	.293
7 自分のまじめさが	.519	.270
5 現在の幸福さが	.511	.261
19 自分の能力・特技が	.499	.249
14 家族の前での自分が	.497	.247
20 自分の趣味が	.477	.227
18 自分の体力が	.442	.195
15 自分の学習態度が	.402	.162
3 過去の自分が	.367	.135
16 自分の成績が	.341	.116
固有値		6.887
寄与率		31.3%
α係数		.904

分析方法：調査結果を主因子法によって因子分析し、抽出された因子と適応度の関係をみるために、分散分析を行った。

結果

自己受容に関する項目について、主因子法による因子分析を行い、固有値1以上の基準から、1因子構造と考えた。因子数を1に設定し、因子負荷量が.40に満たない項目を削除しながら因子分析を繰り返したところ、20項目が残った。20項目のα係数は、.904で、十分な内的整合性があるといえる。この結果をTABLE5に示す。この20項目を「自己受容因子」と命名した。

中学生の自己受容は、さまざまな要因によって形成されていることが考えられる。そこで、学校適応度によって、生徒の自己受容がどのように異なるかについて分散分析を試みた。

「自己受容因子」は類型ごとで異なるのかを検討するために、「目的志向因子」の因子得点を従属変数として、適応型、勉強型、孤立型、逸脱型の4水準を独立変数とする1要因4水準の分散分析を行った結果をFIGURE4に示した。結果は、 $F_{(3,257)}=36.93$ であり、0.1%水準で有意差があった。そこで、LSD法により多重比較を行ったところ、適応型と勉強型、適応型と孤立型、適応型と逸脱型、勉強型と孤立型、孤立型と逸脱型に0.1%水準で有意差が認められた(MSe=0.80)。

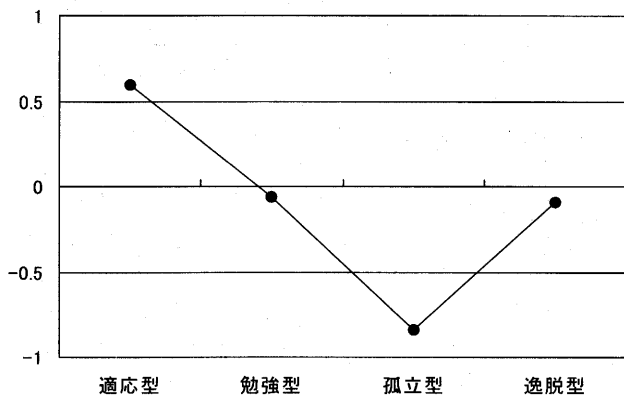


FIGURE 4 自己受容-各類型の平均値

TABLE 6 学校生活に対する意識を目的変数とした重回帰分析 N=642

	学校社会適応因子	仲間志向因子
目的志向因子	-.024	-.029
逃避因子	-.327***	.036
拒否因子	-.131***	.001
希望因子	-.052	.233***
自己受容因子	.346***	.263***
R	.474***	.415***

値は標準偏回帰係数 ***p<.001

このことから、勉強型と逸脱型は同程度の自己受容感を持ち、適応型はそれらよりも有意に高く、孤立型は有意に低い自己受容感をもっているといえる。

未来展望と自己受容のあり方が類型に及ぼす影響目的

これまでの結果では、未来展望には「目的志向」「逃避」「拒否」「希望」という4つの側面があり、適応度によって未来に対する意識が異なっていた。また、自己受容については、適応度によって有意差があった。そこで、ここでは学校社会適応・仲間志向に、未来展望の4つの意識と自己受容感がどのように影響するのかを明らかにする。

方法

調査1の「学校社会適応因子」と「仲間志向因子」の因子得点を目的変数とし、調査3の「目的志向因子」「逃避因子」「拒否因子」「希望因子」、調査4の「自己受容因子」の因子得点を説明変数とし、全変数を一括投入した重回帰分析を行った (TABLE 6)。

結果

学校社会への適応には未来への逃避意識の低さと、未来を拒否する意識が低いこと、高い自己受容が影響していた。仲間志向については、未来への希望の高さと自己受容の高さが影響していた。

考 察

本研究では、登校児を「学校社会適応」と「仲間志向」という2軸から分類し、各類型の自己の価値づけ、未来展望、自己受容のあり方を調べた。

適応型は、現在に対する自己の価値づけが高く、自己受容感も高い。未来展望の「逃避因子」は低いだがこれは現在の自分を受容していることによると考えられる。「希望因子」が有意に高いが、「拒否因子」も孤立型に比して高かった。適応型の生徒は、未来に対して希望や明るいイメージを抱いているが、同時に現在の自分もより価値づけている。それが拒否因子が孤立型より高かった理由であろう。

勉強型の自己の価値づけは、適応型と同じ傾向がみられた。とくに自己受容は平均的であったが、未来展望では「逃避因子」が低く、適応型ほどではないが現在の自分を受容している。

孤立型の自己の価値づけは適応型、勉強型と異なり、現在の自分については拒否的で、未来と過去への価値づけが高い。また、孤立型の未来展望は「逃避因子」が高く、「希望因子」が低い。これらのことから、孤立型の生徒は現在の自分に満足していないため、その未来展望は逃避的であり、未来に対する希望も低かった。

逸脱型は現在に対する価値づけが低く、未来に対する価値づけが高かった。未来展望については「逃避因子」と「希望因子」が高い。このことから、未来に対しては逃避したい気持ちと希望も抱いていると考えられる。

これらのことから、学校社会適応、仲間志向が高い適応型は明るい未来イメージを持ち、自己受容感も高い。逆に、どちらも適応感が低い孤立型は未来に対する希望がなく、自己受容は低い。また、勉強型と孤立型では未来に対する希望や自己受容は同程度であったが、逸脱型の方が「逃避因子」が高いことから、学校社会適応と仲間志向のどちらかの要因が現実から逃避したいという意識に関係していると考えられる。

孤立型の生徒は、登校しながらも適応度が低い。この型の生徒は、未来に対する目的志向を他の類型の生徒と同程度有しており、未来に対する拒否因子も同程度であったため、「学校・仲間志向が低い=未来展望が低い」とはいえない。また、孤立型は未来に対する希望が低く、逃避因子も高かった。つまり、孤立型の未来展望は、未来に対して目的意識をもっていたとしても、それは現実逃避的であり希望を抱いてはいないと考えられた。

引用文献

- 本間友巳 2000 中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析 教育心理学研究, 48, 32-41.
伊藤美奈子 1992 自己受容を規定する理想-現実の差

- 異と自意識についての研究 教育心理学研究, 40, 44-49.
- 金木智子・塚野州一 2001 不登校児における自己の価値づけの検討 富山大学教育学部研究論集, 4, 1-5.
- 小森直美・宗内 敦 1995 児童の自己意識の分析 都留文科大学教育心理学研究紀要, 10, 39-50.
- 文部科学省 2001 「不登校に関する実態調査」(平成5年度不登校生徒追跡調査報告書)
- 二宮克美・大野 久 1990 学校生活における青年 久世敏雄(編) 『変貌する社会と青年の心理』 福村出版, 157-182.
- 大野和男 2000 「大人社会」イメージから見た「大人になること」についての意識の検討 東京都立大学心理学研究, 10, 1-8.
- 白井利明 1997 時間的展望の生涯発達心理学 勁草書房, 1
- 都筑 学 1981 発達の力動過程検査を用いた児童の自己意識の分析 教育心理学研究, 29, 58-64.
- 塚野州一 1978 子どもは自分の年齢をどう価値づけしているか 富山大学教育学部紀要(A文科系), 26, 135-142.
- 塚野州一・金木智子 2000 不登校児における自己の価値づけの検討 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 716.
- Zazzo, B 久保田正人・塚野州一(訳) 1974 発達の力動過程 Zazzo, B(編) 学童の成長と発達 明治図書, 210-252

付 記

本稿は、金木智子の2001年度富山大学大学院教育学研究科修士論文をもとに、加筆、修正したものである。本研究を進めるに当たり、調査に協力いただいた皆さんに感謝します。